

筆文字の魅力が見直されている。自由自在に書いた文字が「筆文字アート」として注目されているほか、書道をテーマにした人気漫画も登場している。若手書道家の活動も目立ち、古めかしいと思われがちだった書のイメージが変わりつつあるようだ。

「自分の感じたまま、思い切って筆を動かせるのは気持ちがいい」と話すのは、書道家の松尾健太さん(24)。松尾さんは千葉県松戸市などで、子どもたちを相手に伝統的な書道を教える一方、筆を自由に使い、アレンジした文字を書く「筆文字アート」の方法を教える通信講座の指導も行っている。

筆文字アートの魅力について、「わざと墨をかすれさせたり、太く書いたり、工夫すればするほど、自分の個性を表現できる。伝統的な書道と違って手本はなく、正解がないから気軽に始めやすい」と松尾さんは話す。

若手書道家の活動が最近、目立っている。昨年のNHK大河ドラマ「天地人」の題字を書いた、書道家の武田双雲さん(34)がその筆頭。伝統的な書とはひと味違う、個性的な文字で人気だ。松尾さんら20代の若手書道家3人が登場する「三人の書道王子と筆文字楽しもう」(広済堂出版)も12月に出版された。担当編集者の野田恵子さんは

若者の心 トラえました



筆文字 味わう楽しさ

書道家が活躍 漫画も人気

「紙いっぱい、思い切って大きく文字を書くのがコツ」と話し、子どもたちの前で、えの「とら」と書く松尾さん(千葉県松戸市) 川口正峰撮影

が、いつの間にか追い風が吹いてきた」と担当編集者は話す。日本テレビ系の情報番組「ズームイン!!SUPER」では09年から、人の背丈以上もある大きな紙に筆で文字を書きあげる企画「書道ガールズ甲子園」を開始。女子高校生のグループが協力しながら文字を書くパフォーマンスの様子が反響を呼んでおり、1日には第4回大会の様子が放映される。

東京・大久保にある書道専門店「新宿キョー和本店」によると、60歳代が中心の客の中に、若い人が目立ち始めているという。墨汁の中に金色や銀色の光る粉が混ぜられている「メタリック書道液」が変わった文字が書けると人気だ。また、書いた後に飾ったり、人に贈ったりできる色紙も売れており、通常の色紙の4分の1サイズの「豆色

「地味でまじめというイメージだった書道が、若者におしゃれにとらえられるようになってきている」と分析する。その一つに、気に入ったヒット曲の歌詞などを即興で書く路上パフォーマンス。

高校生が挙げられるという。文字や言葉を書くので、意味が分かりやすく、イメージが広がりやすい」と話す。書道そのものへの注目も集まる。高校生の書道部での青春を

描いた漫画「とめはねっ!」(小学館)は現在、コミック5巻で110万部のヒット作に。1月にはNHKでテレビドラマ化される。「書道が全く注目されていない2006年に始まった

紙」(10枚400円程度)などをそろえている。店長の小林整さんは「文字そのものを書く楽しみを理解する人が少しずつ増えている」と手応えを話している。